



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	初回面接におけるクライアントの主観的体験の質的研究
Author(s)	草岡, 章大; 岩壁, 茂; 橋本, 忠行
Citation	臨床心理学, 17(6), 840-849
Issue Date	2017-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75781
Type	journal article
File Information	JJCP_17-6_840.pdf



原著論文

初回面接におけるクライアントの主観的体験の質的研究

草岡章大*・岩壁 茂**・橋本忠行***

* 北海道大学大学院教育学院博士後期課程

** お茶の水女子大学基幹研究院

*** 香川大学大学院教育学研究科

セラピーにおける初回面接の重要性は多様な理論に共通しているが、その初回面接でのクライアントの主観的体験を扱った研究は少ない。そこで、本研究では大学付属カウンセリングセンターに来談したクライアントの主観的体験について初回面接直後にインタビューし、質的研究法による分析を行った。その結果、【次への光が見えた】と【セラピーへの幻滅】という2つの上位カテゴリーが見出された。これらから、クライアントが成功と感じる初回面接の特徴として、素晴らしいセラピストとの出会い、クライアントの主体性や自発性の発揮、セラピーの結果への肯定的な確信、の3点が示された。一方で、失敗だと感じる初回面接では、状態や問題の悪化、セラピーへの失望や疑念の高まり、の2点の特徴がみられた。今後の臨床実践において、初回面接を含むセラピー初期に、クライアントが抱く期待と実際とのギャップを扱うことの重要性が示唆された。

キーワード：クライアントの主観的体験、初回面接、期待、中断、質的研究

臨床へのポイント

- クライアントの来談までの苦勞、来談することへの両価的感情や、主体的、自発的な努力が、セラピストに受け止められ、肯定されることで、セラピストへの信頼が高まり、安堵感や肯定的な展望につながる。
- クライアントは、初回面接が否定的な体験になっても、来談に肯定的な意義を見出そうと、次回以降に望みをつなげながら来談を継続し、その間にセラピストが信頼に値するか否かを査定している。
- 初回面接では、クライアントが事前に抱いていたセラピーへの期待を確認し、次回以降の面接では、クライアントが感じた、期待と実際の面接のズレを話し合うことで、面接構造の共有や、作業同盟の構築が促進される。

Japanese Journal of Clinical Psychology, 2017, Vol.17 No.6 ; 840-849

受理日——2017年7月3日

I 問題

1 初回面接とセラピーの中断

初回面接は、クライアント（以下、CI）とセラピスト（以下、Th／カウンセラーとも表記）が初めて出会う場であり、その後続くセラピー（以下、心理療法／カウンセリングとも表記）のひな型ともなる。初回面接の目的や作業課題は多様だが、主に、セラピーに必要な情報収集とCI自身の問題意識を高める（Garfield, 1995）、CIとThの両者がセラピーに取り組む姿勢を作る（Tryon, 2002）、CIの事前の期待と実際のセラピーとの違いを話し合う（Barich, 2002）ことなどが挙げられる。そして、このような作業課題への

取り組みを通じて治療的関係の基礎を作っていくことが、初回面接を含むセラピー初期の重要課題となる。

初回面接はセラピーの入り口であるが、決してたやすい関門ではない。大規模なメタ分析によると、セラピー過程初期での中断の発生率は平均で46.86%にも及ぶとされる（Wierzbicki, & Pekarik, 1993）。Pekarik（1983）によるCIを対象とした中断理由に関する調査では、一部には1回から数回の面接で問題が解決したという回答もあったが、セラピーやThへの不満が26%を占めていた。また、終結を迎えたCIに比べ、中断したCIはThを魅力（attractiveness）や信頼価値性（trustworthiness）に乏しいと評価する傾向もみられた（McNeill, May, & Lee, 1987）。この

ように、CI による Th の評価と中断は深く関わっている。ただし、他の研究によると、CI は Th を批判することへの恐れから、このような不満を面接のなかで直接 Th には言わずに黙従 (deference) する傾向がある (Rennie, 1994)。そのため、初回面接の時点で中断を予見することは難しく、中断後に理由の詳細を把握することもまた困難である。中断を理解するためには、このような選択に至る過程、つまりセラピー過程初期のなかでも特に初回面接における CI の主観的体験を知る必要がある。

2 セラピー初期におけるクライアントの主観的体験

セラピー過程での CI の主観的体験について、セッション内での重要な出来事 (significant event) や助けとなった経験 (helpful experience) の研究が多く行われている。

Levitt, Butler, & Hill (2006) はセラピー終結から 1 年以内の CI 26 名にインタビューを行った。その結果、セラピー初期の CI はセラピーが他者の助力を得る重要な機会である一方で、心理的援助を求めることに懸念や戸惑い、あるいは恥を感じていることを示し、来談にまつわる両価的感情の存在を指摘した。Timulak, Belicova, & Miler (2010) は、一事例の主観的体験から、セラピー初期の CI は感情的苦痛の軽減、重要なテーマの発見、共感的肯定、気づきや洞察の生起を重要な出来事として体験していたことを明らかにした。

国内では、高山 (2013) が試行カウンセリングに参加した CI の主観的体験から、カウンセリング初期に話が深まるプロセスの特徴として、CI の話が Th に受け入れられている感覚、CI と Th の心理的距離の接近、面接構造の理解の 3 点を示した。一方では、話が深まらないプロセスでは、CI の語りと Th の理解のズレ、自分を理解される怖さ、面接構造の誤解が見られたとしている。

このような生産的なセラピーの初期過程の基礎となる作業同盟 (Working Alliance) について、Bachelor (1995) は、セラピー初期の CI は、尊敬、非判断的、共感的理解、Th の傾聴を特徴とする養育的同盟 (Nurturant Alliance) を重視していると報告した。そして、CI への自由記述の調査から、Th との信頼関係や友好関係を基盤とした CI の自己表現や自己開示の促進がその中核にあることを示した。自己開示は、それ自体が重要な治療的要素のひとつであり (Farber,

2006)、来談への両価的な思いを抱えつつも、自身について語ることができる関係を築く作業は、CI の側においても重要な課題である。

ところが、初回面接の重要性は諸理論に共通しているにもかかわらず、初回面接における CI の主観的体験に焦点を絞った研究は少ない。また、先行研究の多くが採用している回顧的インタビュー法では、時間経過や先行するセラピー過程の影響により、初回面接そのものの体験を知ることは難しい。さらには、来談前にセラピーに抱く期待や来談までの過程も、CI の初回面接の体験に大きな影響を与えると予測される。これらから、初回面接や中断をより深く理解するためには、臨床群の CI を対象として、来談前の期待や想像を含む初回面接における主観的体験の探索が重要な課題となる。

II 本研究の目的

そこで本研究では、来談前の期待や想像、Th への内心の反応などを含む初回面接における CI の主観的体験の探索を目的とした。本研究では実際の CI を対象とし、初回面接の記憶が薄れていない初回面接直後にインタビューを実施した。そして、そのデータの主観的で微妙なニュアンスを捉えるため、質的研究法のひとつである、グラウンデッド・セオリー (Strauss, & Corbin, 1990) を用いて分析した。面接中の CI の体験は、“セラピー面接の最中、そしてそれに関係するクライアントの感覚、認識、思考、感情であり、様々な型、対象、知覚の水準、表現の度合い” (Elliot, & James, 1989, p.444) と定義される。本研究ではこの定義を踏まえ、さらに CI が初回面接前に持つ希望・期待・想像がセラピー体験に与える影響も加味し、初回面接の前、最中、そして今後という時系列に沿って、半構造化面接の質問項目を設定した。

III 方法

1 協力者

X 年 6 月から X+1 年 12 月の間に大学付属カウンセリング・センター (以下、センター) に来談した 15 名の CI にインタビューを実施した (表 1)。CI の内訳は、年齢は 10 代から 50 代まで (平均 36.9 歳, $SD=12.2$)、性別は男性 4 名・女性 11 名、面接形態は個人面接 9 件、家族同席・並行面接 4 件、過去に他機関での相談歴は有り 8 名、無し 7 名であった。また、

表 1 協力者属性

CI	年齢	性別	相談経験	主訴	面接形態	担当 Th	来談回数
A 氏	20 代	男性	無	職場での対人関係	個人	修士 2 年	5
B 氏	20 代	男性	有	社会適応困難	個人	大学教員	49
C 氏	40 代	女性	無	子どもとの関係	個人	大学教員	6
D 氏	40 代	女性	有	子どもの不登校	並行	相談員	4
E 氏	40 代	女性	無	子どもの不登校	個人	大学教員	7
F 氏	40 代	女性	無	子どもの不登校	並行	相談員	1
G 氏	30 代	女性	有	社会復帰できない	個人	大学教員	7
H 氏	20 代	女性	無	家族への気持ちの整理	個人	修士 2 年	1
I 氏	40 代	男性	有	恐怖感や、不快な夢	個人	大学教員	9
J 氏	50 代	女性	無	近親者の死去	個人	相談員	6
K 氏	10 代	男性	無	自分の不登校	並行	修士 2 年	2
L 氏	50 代	女性	有	子どもの不登校		相談員	4
M 氏	40 代	女性	有	子どもの精神障害	並行	大学教員	3
N 氏	10 代	女性	有	精神障害		修士 2 年	3
O 氏	40 代	女性	有	子どもの問題と接し方	個人	大学教員	37

親子同席でインタビューを行った CI が 1 名、親子面接だが親のみがインタビューに参加した 1 名も含まれた。事後の調査では、面接回数は平均 9.6 ± 13.9 回（最少 = 1 回，最多 = 49 回）であった。

一方、担当 Th は計 13 名（大学教員 4 名、センター相談員 3 名、大学院生 6 名）であった。なお、陪席の場合は主たる担当 Th のみをカウントした。性別は男性 3 名、女性 10 名、年齢は 20 代半ばから 70 代前半まで、臨床経験は 0 年から 30 年以上、理論的背景はクライアント中心療法、精神分析療法、認知行動療法、折衷的立場などであった。

2 研究者

データ解釈に先駆け、研究者の見方の偏りを明らかにするために研究者情報を記述した。なお、以下の研究者情報は本研究開始時点での情報である。

第一筆者は、主たる研究者であり、男性で修士課程 2 年目に在籍していた。本研究が初めての質的研究であり、研究着手前に約 1 年間の質的研究の訓練を受けた。クライアント中心療法を主たる理論的背景とし、心理療法統合にも関心を寄せた。本研究の仮説として、Th に話を十分に聴いてもらったという感覚や、何かを得られたという感覚を持つことができた場合に、CI はそのセラピーや Th をよりよく評価し、満足すると予測した。

第二筆者は、研究責任者、インタビュアー、データ

分析者、監査者（auditor）の役割を取った。臨床心理士資格を有する男性の大学教員で、臨床歴は 10 年、質的研究歴は 6 年目で、これまで心理療法過程に関する質的・量的研究を行ってきた。統合的アプローチを主たる理論的背景とし、治療関係の確立と感情的変化を重視した。本研究の仮説として、情報収集という面接目的は、CI にとっては必ずしも目標となっておらず、Th に話を聞いてもらうこと、問題が解決するという希望をもてることが大切であると予測した。

第三筆者は、主にインタビュアーの役割を取った。男性で臨床心理士資格を有する大学教員で、臨床歴は 10 年であった。クライアント中心療法、精神分析的な心理療法、認知行動療法、治療的アセスメントを理論的背景としていた。

本研究では、データ分析の段階でさらに 1 名の大学院生の協力を得て、複数の分析者によるデータ分析を行った。

3 インタビュー

本研究では、初回面接直後にインタビューを実施するため、CI に心理的負担を与えないことが重要な倫理的懸念事項であった。そのため、臨床経験および質的インタビューの経験をもつ第二筆者が 10 件、第三筆者が 3 件のインタビューを行った。なお、事例を重ねるなかで CI への否定的影響が確認されなかったため、修士課程修了後にセンターで研修を行っている研

修員1名も2件のインタビューを担当した。インタビューはセンターの一室を利用して、15分以内を目安として行われ、最長で25分程度であった。インタビューは10項目の主質問(表2)を用いた半構造化面接とし、インタビューの流れに応じて適宜質問を入れ替えた。先行研究(Barich, 2002; McNeill et al., 1987; Pekarik, 1983; Wierzbicki, & Pekarik, 1993)では、質問項目やその結果が類型化されていたため、詳細や個別要因を知ることは難しく、量的研究の限界でもあった。そのため、本研究ではこれらの先行研究を参考に、その詳細や具体的体験を知ることができるようなインタビュー質問を設定した。

4 手続き

このセンターでは、相談業務にあたるセンター相談員が来談希望者からの申込電話にて概要を聞き取って受付を行う。通常は担当Thがインターカーを兼務するが、大学院生が担当Thになる場合には、スーパーバイザーがインターカーとなり、担当Thが陪席する形態をとることもあった。本研究では、受付時の情報から、クライシスと推測される強いストレッサーがないこと、心理的困窮度が極端でないことを基準として、インタビューの実施による支障が少ないと判断されるCIを選択し、事前に担当予定のThおよびスーパーバイザーから研究協力の仮合意を得た。初回面接の終了時に、担当Thから研究についてCIに簡単に説明してもらい、CIが関心を示したとき、インタビュアーが面接室に入って研究目的、情報の取り扱い方法、研究に関する連絡先を説明した。研究参加に同意したCIには、研究参加およびインタビューの録音についての同意書に署名を得た。当初は未成年者もインタビュー対象から除外していたが、事例を重ねる過程でインタビューによる否定的影響が確認されなかったため、高校生以上のCIで保護者の承諾が得られた場合には研究参加を依頼した。研究協力の依頼をしたCIの全員が快く同意した。

研究実施当時、研究者らが所属する大学には倫理審査委員会がなかったため、本研究の立案に際して、日本心理臨床学会、日本心理学会、アメリカ心理学会の倫理要綱を参考にして、CIへの倫理的配慮に注意した。インタビューによるCIやThへの影響を十分に検討し、予防策や事後策を含む研究に関わるすべての手続きについてセンターの運営会議による審査と承認

表2 インタビュー質問

1. センターを知った経緯
2. センターや周囲の環境の雰囲気
3. 来談前のThやセラピーの方法などについての想像や期待と、実際の合致の程度
4. Thや面接内容で「良かった」事柄
5. Thや面接内容で「良くなかった」事柄
6. 初回面接の中で「役に立った」事柄
7. 初回面接の中で「役に立たなかった」事柄
8. 「もっとこうして欲しかった」と思った事柄
9. 現在の状況、今後の方針などの説明の有無
10. その他、印象に残っている事柄

を経て実施した。なお、研究実施によるCIからの不満やThから面接継続上での不都合はなかったことが確認されている。

5 データ分析

データ分析に先駆け、録音データを繰り返して聴き直し、インタビューのニュアンスや文脈を把握するアンパッキングを十分に行ったあと、逐語録を作成した(岩壁, 2010)。逐語録の作成に際しては、録音データで散見された音声の変化について、笑いには下線を、声量大きい箇所には太字を、早口の箇所には斜体を、5秒以上の沈黙には秒数を()内に記載して、非言語的特徴が反映されるよう工夫した(表3)。そして、逐語録から、意味単位の内容を短く的確な表現に変換するコード化、類似するコードや意味単位を集めて一つのまとまりを形成する概念形成、複数の概念同士を包括する抽象度の高いまとまりを作るカテゴリー化、カテゴリーを集約してより高次のまとまりを作るカテゴリー統合の各段階を経て分析した。この作業をCIごとに行い、いくつかの体験のまとまりを形成した後、CI間で類似する体験を比較し統合した。

本研究の焦点であるCIの主観的体験は複雑かつ多様な要素の集合であり、その全体性こそが重要であると考えられる。そのため、分析過程において体験の全体性が損なわれることがないように、体験の継時的変化に注意して概念形成やカテゴリー化を行った。さらに、本研究では、「合意による質的研究法」(Consensual Qualitative Research; Hill, Thompson, & Williams, 1997)を応用し、複数の分析者による分析を行った。また、第二筆者が監査者を兼務して分析結果の監査を実施し、議論を重ねた。研究プロジェクト内の研究者

表3 逐語録, コード, 概念の例

逐語	コード	概念
CI: 先生の質問に答える形で自分が体験したことをたどりながら順番に整理できた。で…非常にありがたかったのは、先生から非常に大変な体験しましたね、って。尾を引きずってしまうのは仕方ないって言い方がわかりませんけど、その言葉…嬉しかった、ホッとしました。	Thのガイドで整理できた	〔このセラピストなら上手くいく〕
	大変さを理解してくれるThの一言がありがたかった	
	一言が嬉しくてホッとした	〔自分を純粋に受け入れてくれた〕

表4 カテゴリー及び出現頻度

上位 カテゴリー	下位 カテゴリー	概念	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O
【次への光が見えた】	《素晴らしいセラピストとの出会い》	〔理想的なセラピストとの出会い〕					●					●			●	●	●
		〔自分を純粋に受け入れてくれた〕									●					●	
		〔これまでの誰とも違う人との出会い〕	●										●				
	《最初の一步を踏み出した》	〔解決への希望が見えた〕	●		●		●					●		●			
		〔自分のために勇気を出した〕							●			●	●				
		〔面接目標の達成〕				●		●									
		〔ようやく労力が報われた〕			●								●	●			
	《この先の成功を信じた》	〔このセラピストとやっていく覚悟ができた〕			●												●
		〔このセラピストなら上手くいく〕									●				●		
【セラピーへの幻滅】	《セラピストへの疑い》	〔本当にこのセラピストでいいのだろうか〕		●	●				●	●			●				
		〔期待が裏切られた〕				●		●	●				●				
		〔望みをつなげる〕		●	●	●		●	●	●			●				
	《余計につらくなった》	〔嫌な過去の繰り返しの恐れ〕	●					●	●								
		〔問題の深刻化を想像〕						●					●				

が監査者も担ったことで、CIの主観的体験という非常に複雑なデータを、研究全体への包括的視点に基づいて扱う(Hill, Knox, Thompson, Williams, Hess, & Ladany, 2005)ことができた。このような手続きにより、本研究における分析の水準及び精度の向上に努めた。

本研究の10名までデータを分析した途中経過は、研究プロジェクト全体の概要とともに岩壁(2005)に発表した。その後、さらに5名のデータを追加してカテゴリーを再検討したところ、最終的に肯定的体験に関する3カテゴリーと、否定的体験に関する2カテゴリーの計5カテゴリーが得られ、さらに2つの上位カテゴリーにまとめられた。グラウンデッド・セオリーにおけるデータ分析の終結点の一つである完全な理論的飽和には至らなかったが、各カテゴリーが安定したために分析を終了した。

IV 結果

本研究では、15名の協力者の逐語録に付された総計937のコードの内、719のコードから248の小概念が生成され、これらの統合と修正を繰り返し、最終的に【次への光が見えた】と【セラピーへの幻滅】という2つの上位カテゴリーにまとめられた(表4)。

以下、文中における【 】, 《 》, []の表記は、表4のカテゴリー名表記と対応している。下線部は逐語からの抜粋、()内は筆者による補足、…は逐語の部分省略を示す。なお、CIのプライバシー保護のため内容の理解に支障のない範囲で逐語の一部を修正している。

1 【次への光が見えた】

このカテゴリーは、初回面接を通して喜びや安堵、Thへの信頼などを実感し、将来への希望を見出すことができた体験である。《素晴らしいセラピストとの

出会い」《この先の成功を信じた》《最初の一步を踏み出した》の3つの下位カテゴリーからなる。この上位カテゴリーは13名のCIから得られ、うち、5名は大学院生が担当Thであった。

1. 《素晴らしいThとの出会い》

このカテゴリーは、Thの態度や対応から喜びや安堵、信頼を感じ、これは良い出会いだと捉える体験である。〔理想的なThとの出会い〕〔自分を純粋に受け入れてくれた〕〔これまでの誰とも違う人との出会い〕の3つの概念からなる。

〔理想的なThとの出会い〕は、事前の想像や期待と合致度の高いThが担当となり、嬉しさや驚き、強い信頼を抱く体験である。病気にまつわる思いを抱えて来談したN氏は、「（Thが）すごく優しくて…雰囲気も良かった…話し方も話し易い…ほんとに聞いてほしいって来たので、話せちゃいました」と、期待通りの柔和で受容的態度のThに安堵し、信頼を置くことができた。

〔自分を純粋に受け入れてくれた〕は、Thが自分の話をしっかりと聴き、理解し、自分という存在が肯定され、受け入れてもらえたように感じる体験である。先のN氏は「我慢してたこととか言った時に…頑張ったんだねって…思ったこと普通に言ってくれた感じ…何かうれしかった」と、Thの一言から、理解され、受容されていると感じた。

〔これまでの誰とも違う人との出会い〕は、Thが自分の話を遮ったり否定したりせず、時にはThが個人的経験や事例を交えるなど、今まで相談した誰とも違う態度で自分の話を聴いてくれたことに安堵や喜びを感じる体験である。会話に苦手意識を抱えていたK氏は「ちゃんと聞いてくれた…他人とかにあまり聞いてもらったりできなかったから」とThの傾聴的態度に安堵を感じて苦手の自己表現にも取り組むことができた。

2. 《最初の一步を踏み出した》

自身が傾けた努力や勇気が報われたように感じ、自らの力で進むことができたという充足感を得る体験である。この体験は、〔解決への希望が見えた〕〔自分のために勇気を出した〕〔面接目標の達成〕〔ようやく労力が報われた〕の4つの概念からなる。

〔解決への希望が見えた〕は、問題解決の糸口をつ

かめたとか、問題解決の道のりを自らの力で歩き始められたと実感する体験である。情緒的な混乱状態で来談したJ氏は、初回面接を通じて「私にしたら、お日様かもしれないです…次の春に芽を出そうとしてる蕾がいっぱいある」と、暗闇に光が差し込み、未来への希望が確かなものに感じられた。

〔自分のために勇気を出した〕は、セラピーという大きなチャレンジに向けて自分を鼓舞した体験である。改善を望みながらも来談への葛藤を抱えていたK氏は、「あんまり行きたくない…やっぱり行かないとだめかなって思って具合悪いまま行ってみたら、結構良かった」と、自分を奮い立たせて来談したかいがあったと感じた。

〔面接目標の達成〕は、CIなりの初回面接の目標を達成できたという充実感を伴う体験である。子どもの改善を望んで来談したD氏は、「（Thに）全部伝えられるものは伝えたい…大体それは全部言えたかな」と、自分なりの目標は達成できたと感じた。

〔ようやく苦勞が報われた〕は、今回の来談によって状況の好転予測が立ち、これまでの様々な努力が報われたように感じる体験である。時間をかけて準備して初回面接に臨んだC氏は「一生懸命やってきたことを認めてくださった…そんな気負わないでって言われて…気負って頑張ってきた部分あるのかなあって」と、Thの一言からこれまでの努力が報われたような思いを味わい、さらに自身の気負いにも気づいた。

3. 《この先の成功を信じた》

担当Thとの組み合わせの良さから、問題解決への動機づけが高まり、問題の解決や軽減などの肯定的な結末を確信する体験で、〔このセラピストとやっていく覚悟ができた〕と〔このセラピストなら上手くいく〕という2つの概念からなる。

〔このセラピストとやっていく覚悟ができた〕は、自分の問題とThの専門性や経験との相性の良さや、あるいは自分にはこのThが必要なのだと感じて、この担当Thと一緒にやっていくのだという覚悟や動機づけが高まる体験である。C氏は、「私には△△先生が必要だったんだろうなって思ってる」と、Thの専門領域を知って自分の課題が明確になったように感じた。また、「とにかく話を聴いてもらいたかった」O氏は、Thからの助言や今後への示唆によって気持ちの揺らぎが軽減した。そして、「相談に乗っていただ

けるんだなって心強く思いました…一つポイントを今日おっしゃってくださったので…やらなきゃなと思ってます」と、Thを問題解決のパートナーのように感じ、今後の主体的な取り組みへの意欲が高まった。

〔このセラピストなら上手くいく〕は、このThと一緒に取り組みれば、よい結果が得られると確信する体験である。M氏は以前に市民向け講座で知ったThが担当になった驚きと嬉しさに加えて、「(面接中に)とりとめがなくなってきた…それでいいんですよって言うてくれて安心しますよね。…こうやって聞けばいいんだと…すごいなあと」と、Thの面接技術の高さに直に触れた。さらに、並行面接でも子ども(N氏)に良い変化が起きたのを目の当たりにして、セラピーの成功を確信した。

2 【セラピーへの幻滅】

このカテゴリーは、《セラピストへの疑い》《余計につらくなった》という下位カテゴリーから構成される。初回面接が自分の期待や希望に反した内容や結果となり、セラピーやThに否定的な感情を抱いたり、否定的な結末を思い描くようになる体験である。この上位カテゴリーは8名のCIから得られ、そのうち2名は大学院生が担当Thであった。

1. 《セラピストへの疑い》

期待や希望に反する初回面接だったことでの、Thやセラピーへの疑念や落胆が中心となる体験である。この体験は、〔本当にこのセラピストでいいのだろうか〕〔期待が裏切られた〕〔望みをつなげる〕の3つの概念からなる。

〔本当にこのセラピストでいいのだろうか〕は、期待外れのThに疑いや不信感を抱く体験である。H氏は、「(Thは)年上の異性の人かなと思ってたら、すごい歳の近い同性が来てびっくりした…ぐちゃぐちゃになってるのを分析してくれる人かと思ったんですけど」と、想像から大きく外れたThに、頼りなさや落胆を感じた。また、B氏は、面接の進め方がスムーズではないThを、「カウンセラーの方と話している感じがしない…今の段階で確信してこの人ならっていう感じではない」と評し、不信感を隠さなかった。

〔期待が裏切られた〕は、期待や想像したThと実際のThとの間にある大きな隔たりに落胆や怒りを覚えたり、問題解決の行き詰まりを感じたりする体験で

ある。D氏は、「(子どもの気持ちを)引き出してくれるんだったら、全部話をして伝えたい」と意気込んだものの、Thは何ら助言や解決策を示してくれず、「(この先)何を望んでいいのかも良くわからない」と落胆した。

〔望みをつなげる〕は、自分に非があるとみなしたり、期待と実際のギャップを逆に良かったと捉えなおしたりすることで、落胆、失望や不安などを緩和させ、来談に肯定的な意味を見出そうとする体験である。上述のB氏は「多少期待の部分が大きすぎた」と自らの過大な期待を調整してThへの不信に対処していた。また、G氏は「(Thが)新人さんっぽく見えた…でも逆によかったりするのかな…変に専門家だったりすると押し付けがましく言うんじゃないか」と、担当Thの特徴を肯定的に捉えなおそうとしていた。

2. 《余計につらくなった》

改善を願って来談した初回面接で感情的な辛さを味わい、否定的な結末を予期してしまう体験であり、〔嫌な過去の繰り返しへの恐れ〕と〔問題の深刻化を想像〕の2つの概念からなる。

〔嫌な過去の繰り返しへの恐れ〕は、「藁をもすがるような気持ち」(F氏)で来談したにもかかわらず、過去のつらい体験と同様の事態がまた起きるかのように感じて、不安や恐れ、怒りなどが賦活される体験である。A氏は「仕事ではいつも追い立てられてるような感じ」の息苦しさを抱えて来談したが、Thが時計を見る仕草から職場での息苦しさを再び味わった。また、他機関での相談の失敗を経て来談したF氏は、「(今回の親子合同面接で)子どもとちょっと言い合いもあった…私自身もまた落ち込む」と、過去の失敗がまさしく再現されてしまい、肩を落とした。

〔問題の深刻化を想像〕は、Thの配慮の無さで問題が一層深刻になったり、自分が「実験材料にされる」(L氏)かのような恐れが中核となる体験である。上述のF氏は〔嫌な過去の繰り返しへの恐れ〕と共に、「(母子合同面接で)絶対反発して、いい結果にはならないなあって思ったんですけど。はじめのうちはやっぱりひどい状態でした」と怒りや落胆の入り混じった瞬間を振り返った。

V 考察

初回面接におけるCIの主観的体験を検討した結果、

非常に多様な体験が得られたが、それらは2つの上位カテゴリーにまとめられた。以下では、CIの主観的体験から見た初回面接の成功と失敗について考察する。

1 CIの視点による初回面接の成功

本研究で得られた【次への光が見えた】という体験は、CIにとっての成功体験と言える。《素晴らしいセラピストとの出会い》は、ThがCIの来談までの努力や苦勞、来談にまつわる種々の感情も含めたありのままを肯定し、受容してくれたという体験であった。Thの共感的肯定(Timulak et al., 2010)や、CIの話がThに受け入れられている感覚(高山, 2013)は、セラピー初期のCIが重視する養育的同盟(Bachelor, 1995)の構築につながる。その結果、Thが信頼に値する人物だという感覚がより確かになるほど、Thとの出会いを素晴らしい機会だと感じると考えられる。

次に、《最初の一步を踏み出した》で中心的な役割を果たしたのは、CIの主体性や自発性の発揮であった。それは、不安を抱えながらも来談できた、自らについて語ることができた、あるいは課題に取り組む意欲が生じた、などの感覚が得られ、今回の来談にはプラスの意義があると感じられることでもある。例えば自己開示の治療的機能(Farber, 2006)も、Thに伝えることが必要なのだという、主体性や自発性に後押しされることで高まっていくと考えられる。そして、このようなCIの努力も含めてThに肯定されることが、〔ようやく労力が報われた〕という安堵感や開放感へと結実する。また、無力感を抱えるCIにとっては、自分の足で踏み出せたという実感は自己効力感の回復にもつながるだろう。

3つ目の《この先の成功を信じた》体験の中心には、将来への肯定的で確信的な予測があり、その根底にはThへの信頼があった。初回面接を通じてCIは『このThなら』という信頼の高まりを実感することで、この先への明るい展望へとつながっていく。さらには、Thが全幅の信頼をおける相手だと感じられると、明るい展望は成功への確信へと変化し、来談継続への動機づけも強まると考えられる。ただし、《この先の成功を信じた》体験を報告したCIは15名中4名に留まっていた。多くのCIにとって、肯定的な展望や確信は数回の来談を経て徐々に実感されていくものであると考えるべきであろう。

これらをまとめると、CIが初回面接を成功だと感じるプロセスとして、以下の特徴が挙げられる。まず、肯定的、受容的態度で傾聴してくれるThとの素晴らしい出会いがあり、次に、そのThとの関係のなかで主体性や自発性が発揮できることである。そして、セラピーの行く末に肯定的な確信を持てたとき、CIにとって初回面接はより意義深い成功体験として感じられるだろう。

2 CIにとっての初回面接の失敗と中断

次に、【セラピーへの幻滅】だが、これは本研究に参加したCIの過半数が何らかの否定的体験を味わっていたことを示している。15名中4名が報告した《余計につらくなった》は、問題や状態の悪化を感じた体験であり、CIにとっては明らかな失敗を意味するだろう。また、15名中7名が報告した《セラピストへの疑い》は明らかな失敗ではないが、セラピーの先行きに懸念を抱かざるをえないような否定的体験である。この体験は、CIがThに抱く不満と中断についての先行研究(McNeill et al., 1987; Pekarik, 1983)の結果と共通点が多いが、本研究の結果はさらに一步踏み込み、CIが否定的な理由によって中断へと至る、その最も初期の過程を示していると考えられる。

一方で、【セラピーへの幻滅】を報告した8名のCIのうち、初回のみ来談となったのが2名に留まったことにも注目したい。通常、状態や問題の悪化はもちろん、事前の期待や想像との大きな不一致、それらに起因する失望や疑念の高まりという否定的な体験をしたのであれば、CIは来談を取り止めるだろう。しかし、実際には多くのCIが2回目以降も来談しており、これには〔望みをつなげる〕が重要な役割を果たしていた。〔望みをつなげる〕は、幻滅のなかにも、来談に肯定的な意義を見出そうとする自助努力であり、動機づけを維持する役割もあったと考えられる。さらには、CIは望みをつなげて来談を続ける間に、担当Thの査定も行っていると推測される。そして、以降の面接において幻滅がさらに強まったり、問題解決には至らないだろうと判断した時に、Thを「解任」することになる。これが、CIの視点による「中断」に至るプロセスの一つだと考えられる。

本研究の結果から、初回面接での作業課題として、以下の臨床実践への示唆が得られた。① CI自身の初回面接での達成目標を確認する、② Thとの関係への

期待や想像を確認する, ③初回面接終了時に, 次回以降の面接で期待と実際のズレを確認したい旨を伝える。初回面接を含むセラピー最初期に期待や想像と実際のズレについて話し合うことは, セラピーがオープンに語れる場であるという面接構造の共有, Th への信頼感の高まりや作業同盟の構築, Cl の自己開示の促進などにつながると考えられる。

VI 本研究の意義と今後の課題

本研究は, 初回面接直後にインタビューを実施したことにより, 従来の質問紙調査や回顧的インタビューでは到達が難しかった, 面接中の体験に近い生きた体験の詳細に触れることができた。また, 本研究の結果は, Cl は初回面接において, セラピーへの期待と実際の合致の程度, 問題や状態の改善にどの程度肯定的な見通しが立つかを重視していることが示された。従来の Th の視点においては, 初回面接では情報収集および治療関係の構築が強調されてきたが, 本研究の結果からは, Cl と Th の間には初回面接から既に重視する事柄に乖離が生じていることになる。しかし, Cl は黙従する傾向があるために, Th がこのような乖離を知ることは難しく, 突然の中断を受け入れざるを得なかった。この点において, 本研究は Cl がセラピー初期に中断を選択する過程の一部を明らかにし, 今後の臨床実践をより良くするための重要な資料を示すことができたと考えられる。

一方で, いくつかの限界も認められた。Cl の体験は個別性が高く非常に複雑であり, 下位カテゴリーは安定したが, コアカテゴリーの出現および理論的飽和には至らなかった。また, 初回面接直後でのインタビューの実施は, Cl にとっては面接体験を吟味する時間がなく, 十分に探索されていない体験も多いと考えられる。今後は, 面接継続者と中断者の初回面接体験の差異, Th の臨床経験の多寡と初回面接体験の差異, 初回面接体験が以降の過程に与える影響などが課題となるだろう。そして, セラピーをより深く理解し, よりよい実践を行うためには, このような Cl の視点からセラピーのプロセスと効果をとらえる作業が非常に重要になるだろう。

▶ 謝辞

本研究は 2003 年度札幌学院大学大学院臨床心理学研究科に提出した修士論文に新規データを追加し, 新たに執筆

したものです。貴重な体験をお話くださったクライアントの皆様, 札幌学院大学心理臨床センターでの相談業務に携わる皆様, インタビューとデータ分析に協力くださった荒川和歌子さん, 村井亮介さん, そして, 研究にご協力くださった全ての皆様に心より御礼申し上げます。

▶ 付記

本研究は, 科学研究費補助金 (平成 15 年度～18 年度) 若手研究 B, 課題番号 15730318, (研究代表者: 岩壁茂) の一部として実施した。

▶ 文献

- Bachelor, A. (1995). Clients' perception of the therapeutic alliance : A qualitative analysis. *Journal of Counseling Psychology*, 42(3), 323-337.
- Barich, A.W. (2002). Client expectations about counseling. In G.S. Tryon (Ed.), *Counseling based on process research : Applying what we know*. Allyn & Bacon, pp.27-65.
- Elliot, R., & James, E. (1989). Varieties of client experience in psychotherapy : An analysis of the literature. *Clinical Psychology Review*, 9, 443-467.
- Farber, B.A. (2006). *Self-disclosure in psychotherapy*. The Guilford Press.
- Garfield, S.L. (1995). *Psychotherapy : An eclectic-integrative approach*. 2nd ed. John Wiley & Sons, Inc.
- Hill, C.E., Thompson, B.J., & Williams, E.N. (1997). A guide to conducting consensual qualitative research. *The Counseling Psychologist*, 25(4), 517-572.
- Hill, C.E., Knox, S., Thompson, B.J., Williams, E.N., Hess, S.A., & Ladany, N. (2005). Consensual qualitative research : An update. *Journal of Counseling Psychology*, 52(2), 196.
- 岩壁 茂 (2005). 臨床心理学の最新知見 (24) 心理療法の効果測定 ―初回面接の実践効果研究― 臨床心理学, 5(1), 123-128.
- 岩壁 茂 (2010). はじめて学ぶ臨床心理学の質的研究 ―方法とプロセス― 岩崎学術出版社
- Levitt, H., Butler, M., & Hill, T. (2006). What clients find helpful in psychotherapy : Developing principles for facilitating moment-to-moment change. *Journal of Counseling Psychology*, 53(3), 314.
- McNeill, B.W., May, R.J. & Lee, V.E. (1987). Perception of counselor source characteristics by premature and successful terminators. *Journal of Counseling Psychology*, 34(1), 86-89.
- Pekarik, G. (1983). Improvement in clients who have given different reasons for dropping out of treatment. *Journal of Clinical Psychology*, 39(6), 909-913.

- Rennie, D.L. (1994). Clients' deference in psychotherapy. *Journal of Counseling Psychology*, 41(4), 427.
- Strauss, A., & Corbin, J. (1990). *Basics of qualitative research : Grounded theory procedures and techniques*. Sage Publications, Inc.
- (ストラウス, A., コービン, J. 南 裕子 (監訳) (1999). 質的研究の基礎 ―グラウンデッド・セオリーの技法と手順― 医学書院)
- 高山由貴 (2013). CIの主観的体験から見たカウンセリング初期のプロセス ―試行面接における話の深まりに注目して― 臨床心理学, 13(5), 689-699.
- Timulak, L., Belicova, A., & Miler, M. (2010). Client identified significant events in a successful therapy case : The link between the significant events and outcome. *Counselling Psychology Quarterly*, 23(4), 371-386.
- Tryon, G.S. (2002). *Counseling based on process research : Applying what we know*. Allyn & Bacon.
- Wierzbicki, M., & Pekarik, G. (1993). A meta-analysis of psychotherapy dropout. *Professional Psychology: Research and Practice*, 24(2), 190-195.

A Qualitative Analysis of Clients' Subjective Experiences in the Initial Session

Akihiro Kusaoka *, Shigeru Iwakabe **, Tadayuki Hashimoto ***

* Graduate School of Education Doctral Program, Hokkaido University

** Faculty of Core Research, Ochanomizu University

*** Graduate School of Education, Kagawa University

Although the importance of the initial session is well known in psychotherapy theories, few studies focus on clients' subjective experience in this session. This study aims to understand clients' subjective experiences in the initial session. The authors interviewed clients immediately after the initial session, and these interviews were then analyzed using qualitative research method. The following major categories were obtained: "Ray of Hope" and "Disillusionment to Therapy". These results revealed three features of success for clients in the initial session: a) a wonderful encounter with the therapist, b) developing autonomy and spontaneity, and c) the conviction of a positive outcome. This study also found two features of failure: a) worsening of the problem and b) disappointment and mistrust toward therapy. These results suggest the importance of to work with gaps between clients' expectancies and actual therapy they had felt.

Keywords : clients' subjective experiences, initial session, expectancies, dropout, qualitative research